

返還十五を迎えた香港

日暮高則

知人のビジネスの手伝いで、ちょうど主催返還十五周年目に当たる今年六月と七月、二回香港を訪れた。私は一九九四―一九八八年にマスコミの仕事で香港に駐在した経験があり、その後もしばしば訪問していたが、最近では三年ぶり。結論的に言えば、今回感じた三年間の変化は、以前と比較できないほど大きいものだった。

その端的な変化の一つが香港ドルの衰退と人民元の「躍進」。九〇年代は「香港ドル」―「二人民元の交換レート」であり、たまに深圳などに買い物に行くとき、店員は嬉々として香港ドルを受け取ったものだった。それが〇〇年代半ばころになるとほぼ同価値となり、さらに今回行ってみると、立場が逆転、なんと一人民元＝一・二香港ドルとなっていた。したがって、香港サイドは「人民元大歓迎」。従来からの薬屋や貴金属店ばかりでなく、デパートやスーパーでも人民元を受け取るようになった。今後、コンビニやタクシーまで毛沢東札を受け取るようになったら、もう香港ドルはもう用済みとなるかも知れない。

次に実感したのは、大陸政治内幕の多さ。もちろん、以前にも『竹のカーテン』の中を伝える多くの政治雑誌はあった。たとえば、

親共産党系では鏡報、広角鏡、反共産党系では争鳴、動向、開放、前哨など。だが、今回行ってみて気づいたのは、従来ものに加え、新たに五、六冊の月刊誌が登場していることだった。これらは香港人だけで買える数ではない。となると、主な購読者ターゲットは大陸から来る観光客にあるのだろう。書店では、雑誌に限らず、薄熙来事件の暴露本、九〇年代汚職で逮捕された陳希同元北京市書記の口述本なども平積みされていた。いずれも出版の自由がない大陸でもお目にかかれない「貴重な」出版物だけに、大陸客にとっては垂涎の的である。

以前にも増して、ブランドショップの多さも目立った。九〇年代に私が通勤に使っていた地下鉄金鐘駅から中環に向かう商店街「金鐘廊」は、以前サラリーマンに朝食を提供するスナックや小物店、コンビニが多かったが、今回、その場所が全面改装され、一面通して女性向けファッションのブランドショップに変身していた。銅鑼湾の「そごう」も一階にあるフランス、イタリア系のブランド店もますます繁盛しているようだ。友人に聞けば、ブランドショップに限らず、貴金属店にも金を買い求める大陸客が殺到しているという。

不動産価格も最近高騰している。九七年の返還直前に価格はピークを迎えたが、返還後は徐々に下がり、〇三年のSARSショックで暴落していた。しかし、その後大陸の金持ちが投資目的で買いに入ってから徐々に回復、ちょうど私が訪問した六月、テレビのニュースで「不動産価格は九七年時点に戻った」と報じていた。要因はそれだけではない。香港は法人税がオフショア取引を除いて一六%という安さ。そうした税制に日本はじめ諸外国の企業が目を向け、中国国内ビジネスの決済の拠点として香港を再認識し始めた。つまり、香港に仮本社を置く企業が多くなり、新たな不動産需要が出てきたのかも知れない。

標準中国語を話す人が多くなったのは、私もタクシーやコンビニなどで実感できた。香港政府は、返還後すぐに英語学校を廃止して中国語（広東語）学校を増やしたほかに、中学校の授業に標準語授業を組み入れた。返還後十五年たてば、三〇歳までは当然、標準語が話せるようになる。若い世代に限らず、英語教育を受けた世代も標準語に力を入れ始めたようだ。ただその分、英語の普及度が低くなっているのではないかと印象を受けた。

香港には毎月平均九〇―一〇〇万人の大陸客が来ているが、これはマルチビザ、電子通関が可能などスムーズ化したことが背景にある。大陸客が多くなれば、当然香港人との軋轢も生まれる。友人に聞いたところ、大陸人のマナーの悪さが一番の問題になっているという。子供を所構わず大小便させる、トイレを汚す、行列に割り込む、試着室に未購入品を置き放しにする、禁止場所のところで喫煙する―など。私の友人は、ある母親が地下鉄

の中で、子供のちんちんをペットボトルに差し込み、小便させている光景を目撃した。香港の地下鉄では飲食がご法度だが、ある大陸の母親が子供に食べ物を与えていて、香港人が注意すると、この母親は「子供だから仕方ないだろう」などと逆ギレ。この一件が、ネット上でビデオ公開され、香港人の反発を買ったこともあったという。

今年初め、大陸人妊婦の香港出産問題も大きな話題となった。香港と何の関係もない大陸人夫婦（双非妊婦）の妊婦が香港に来て出産する問題で、昨年一年間に香港で生まれた九・五万人の新生児のうち四・四万人がなんと大陸妊婦からだった。香港で出産したがるのは、①香港では国内より医療、福祉の面が進んでいる、②香港は出生地主義だから、同地で出生した子供は即、香港籍が取れる、大陸人が将来、香港出生の子供を手づるに外国への移民の足掛かりとしたい—などの理由があるためだ。

大陸人妊婦が来れば、香港人妊婦の産院ベッドは奪われる。このため、堪忍袋の緒を切らした香港人妊婦がデモをして「大陸人は来るな」とアピールした。また、今年二月一日付の反中国系紙「リングゴ日報」には「われわれは我慢の限界だ」との意見広告も。一面全部を使ったそこには「大陸の妊婦のために、香港で十八分ごとに一〇〇万香港ドルの経費が浪費されている。あなたはそれを許容できますか」と書かれてあった。当局側も動きだし、胡定旭・香港医療管理局主席は三月四日、大陸居住者の香港出産許可人数を一二年中、三・五万人前後に抑えると発表。入境処（出入境管理部門）も、双非妊婦を香港に連れてくることを生業としている大陸人女性を検挙し、

実力行使に出ている。

こうしたことを受けて、香港人の対中国差別化意識強まるばかり。香港大学による今年六月の調査によると、「返還で中国国民になったことは誇りだ」と答えた香港市民は三七％。北京五輪があった〇八年に比べ一三ポイント下落。半面「誇りに思わない」は〇八年より一〇ポイント高い五八％となった。一方、大陸人は大陸人で香港人の感情を逆なでする。「香港経済は中国の反映で支えられている」とか「中国中央政府が面倒を見なければ、香港は終わりだろう」などという無神経な発言がテレビなどで散見されるという。香港人が特に激しく怒ったのは、今年一月下旬、孔子の子孫と言う孔慶東北京大学教授の暴言。「香港人は中国人と思っていないようだが、彼らは植民地時代に英国人から犬扱いされてきたので、人間でなく犬なのだろう」と犬扱いしたこと、これにはさすがに大陸内部からも批判が出た。

最後に政治の話にも触れておく。七月一日に第三代の行政長官として梁振英氏が就任した。一九九七年に就任した初代行政長官の董建華氏は海運会社オーナーの財界人、二〇〇五年就任の曾蔭権（ドナルド・ツァン）氏は公務員出身。前二人に比べて第三代は測量技師という平凡な経歴の人でちょっと奇異な感があるが、実は彼が香港の有名な「隠れ共産黨員」であると知れば、納得できる。千二百人の投票人による今回選挙では、財界人二世の唐英年氏が有力だったが、共産党が介入して強引に梁氏にしまった。

北京指導部が今回に限って特に黨員を担ぎ出し、共産党による香港の直接支配を進め

ることにはちゃんと理由がある。二〇一七年の次期行政長官選挙と二〇二〇年の立法会（議会）選挙は全有権者による普通選挙と決まっている。となれば、場合によっては、反共産党の行政長官が当選したり、民主派が立法会で多数を取ったりする可能性もまったくないわけではない。そういう「最悪」のシナリオに備えて今後五年かけ、行政区政府組織、職員自体を共産党の命令一下で動く形に変えてしまおうという意図があるのではないかと推測できる。

一九八九年天安門事件を記念する毎年恒例のビクトリア広場の六・四集会。事件十周年の九九年には総参加者四一五万人程度だったが、ここ数年は十万人以上、今年十八万人が参加したという。参加者が増えたのは大陸客の影響で、今年は三、四万人が大陸から来たのではないかと見られている。つまり、香港は大陸人の往来自由幅が広がったことにより、国内反体制の拠点、基地になりつつある。中央政府はこうした香港の地位をずつと許すわけはなく、取り締まりの方法を虎視眈々と狙っていよう。あるいは、香港基本法の二三条にうたわれた「人民政府を転覆するいかなる行為も法律で禁止しなければならぬ」をもとにして特別行政区の保安条例を作り、中央政府や、共産党、中国指導者への個人攻撃もできない形にするかも知れない。一国二制度のうち、中央政府は今後、「一国」を強調してくるのだから、香港人民はこれを跳ね返して「二制度」を守り抜かなければならぬ。黨員行政長官が選ばれた今こそ、正念場の闘いになる。

日暮高則（ひぐらし・たかのり）